

善いことをした喜び

小川未明

青空文庫

さよ子は、叔母さんからもらったおあしを大事に、赤い毛糸で編んだ財布の中に入れてしまっておきました。秋のお祭りがきたら、それでなにか好きなものを買おうと思つていました。

もとよりたくさんのお金ではなかったのです。けれど、さよ子はそれを楽しみにして、ときどき机のひきだしの中から、赤い毛糸の財布を取り出しては、振つてみますと、中に銭がたがいに触れ合つて、かわいらしい鳴き音をたてるのでありました。

さよ子は、それでほおずきを買おうか、南京玉を買おうか、それともなにかおままんごとの道具を買おうかと、いろいろ空想にふけたのであります。すると、なんとなくその日が待ち遠しかったのであります。

まことに、いい天気の日で、のら仕事の忙しかったときでありました。家々のものは、みんな外の圃に出ている、家にあるものはほとんどありませんでした。

家の前には、大きな銀杏樹がありました。その葉がしだいに色づいてきました。さよ子は壊れかかった石段に腰をかけて、雑誌を読みました。そのとき、同じように、隣のおばあさんが、やはり家の前に出て、日当たりのいい暖かな場所にむしろを敷いて、

ひなたぼつこをしていました。

おばあさんは、日ひごろからたくさんお金かねをためているといううわさがたっていました。けれど、おばあさんは、なかなかのけちんぼうで、めったにそのお金かねを出すだということをしませんでした。

おばあさんは、このごろ、ひまさえあればお金かねのことを考えていました。自分じぶんが死しんでしまつたら、この金かねをどうしようかと思おもいました。これまでいっしょうけんめいであめた金を、他人たにんにやつてしまうのは、まことに惜おしいことだと思おもいました。せがれにも、嫁よめも、この金かねはやれない、みんな自分が死しんでゆくときには、持もつてゆかなければならぬと思おもいました。

「いつたい、いくらあるだろう。今日きょうは、せがれも嫁よめも留守るすだから、ひとつ勘かんじょう定じょうしてみよう。」と、おばあさんは、だれもいないのを幸さいわいに、懐ふところから大きな財布さいふを出だして、口くちを開ひらいて、楽たのしみながら算かぞえはじめたのであります。

「なかなかたくさんある。これをせがれに見みつけられたら大事だいじだ。しかし、せがれも嫁よめも、まだ帰かえつてくるはずがないから安心あんしんだ。」と、おばあさんは独ひとごとり言ことをしながら、しわの寄よつたてのひらに銭ぜにを並ならべて、細ほそい指ゆびさき先さきで勘かんじょう定じょうしては、前まえ垂だれの中なかに移うつしてい

ました。そして、すっかり勘定してしまつたら、それを財布の中にしまつてもりでおりました。

ほんとうに暖かな、よく晴れた空に太陽が燃えて、風すらない秋日和でありました。大きな銀杏樹の上で、小鳥が鳴くほかに、だれもおばあさんを脅かすものはなかったのです。

「おばあさん。」と、雑誌に読み飽きたさよ子は、あちらの石段から、こちらを向いて、さびしいので呼びかけました。

もし、おばあさんが機嫌がよかつたら、そばへ行って、いま読んだおもしろいおとぎばなしを、おばあさんに聞かしてやろうと思つたのです。それは金銀宝石を積んだ幽霊船が、ある港へ着いたときに、そのお金や宝石がほしいばかりに、幽霊を自分の家につれてきて泊めた、欲深者の話でありました。

「おばあさん、おもしろいお話を聞かしてあげましようか。」と、またさよ子はいいました。

けれど、おばあさんは、返事をしませんでした。

これはきつと機嫌がよくないのだらうと思つて、さよ子は、また雑誌を開いて、ほかの

お話を読んでいたのでありました。

「うるさい子だ。何度呼んでも黙っていてやろう。」と、おばあさんは、口の中でいって、知らん顔をして銭を勘定していました。

そのうちおばあさんは、やつと銭を勘定してしまいました。思ったよりもたくさんのを喜んで、またもとのように財布に移しました。そして、もしや、身の周囲に銭を落としはしなかつたかと、ぐるぐる見まわしていました。

このとき、太鼓をたたいて、一人の哀れなじいさんの乞食が、「南無妙法蓮華経。」
「といって、家の前に立って、あわれみを乞うたのであります。

けちんぼうのおばあさんは、乞食を見るのが大きらいでありません。断るのもめんどろおも
と思つて、手ににぎっていた財布を、急にむしろの下に隠して、目をつぶつて眠つたふりをしていたのであります。髪の毛の白くなつた、目のしよぼしよぼとしたじいさんの乞食は、いつまでもそこに立って題目を唱えていましたが、おばあさんは、まったく眠つてしまつたように目をふさいで、じつとして身動きすらいたしませんでした。

しばらくして、乞食は、もはや望みのかなわなれないものと思つてか、その家の前を立ち去つて、さよ子のいる方へと歩いてきました。やがて、さよ子の家の前に立って、太鼓をた

たいて哀あわれな声こえで題だい目を唱となえたのであります。

さよ子は、おじいさんの乞食こじきを見ると、急きゆうに目めの中に、いっぱいの涙なみだがわいてきました。ほんとうにふしあわせの人ひとだと思おもったからであります。さよ子は、懐ふところの中から、赤あかい毛糸けいとの財布さいふを取り出だしました。そして、その中なかの銭ぜにをおじいさんにやってしまったのであります。

「ありがとうございます。」と、おじいさんの乞食こじきは、いくたびとなく、さよ子こに向むかってお礼れいを申もうしました。

さよ子は、自分じぶんは、なんにも買かわんでいいから、もっとお金かねがあつたら、この哀あわれなおじいさんにやりたいものだこころうちと、心おもの中で思おもっていました。

「ありがとうございます。」と、また最後さいごに繰くり返かえして行って、おじいさんの乞食こじきは、家いえの前まえを立たち去さりました。

さよ子は、石段いしだんの上うえに立たつて、いつまでも哀あわれな乞食こじきの行方ゆくえを見守みまもっていましたが、いつしか知しらず、その太鼓たいこの音おとは遠とほくかすかになつていったのであります。

その夜よ、さよ子は、お母かあさんに昼間ひるまの乞食こじきのことを話はなしました。

「いまごろ、あの乞食こじきは、どうしたでしょうか。」とききますと、お母かあさんも、目めに涙なみだを

ためて、

「それでも、おまえのやったお金で、暖かいお芋でも買って食べることが出来るだろう。」
といわれました。

これを聞いたさよ子は、心から自分はいいいことをしたと思いました。

一方、おばあさんは、ほんとうに居眠りをしてしまいました。そして大事な財布を、むしろの下に入れたことを忘れてしまいました。

晩方、家に帰ってきたせがれが、その財布を見つけて大喜びをしました。酒好きのせがれは、そのお金を見ると我慢することができなくて、酒を飲みに出かけたそうです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第3刷発行

初出：「童話」

1921（大正10）年1月

※表題は底本では、「善《よ》いことをした喜《よろこ》び」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年12月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

善いことをした喜び

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>